

北山林業地は、京都市北区中川、小野、大森、杉坂、真弓（約3,500 ha）及び周辺に



位置する京都市北部や南丹市内の北山杉を主とした森林です。北山林業の歴史は古く、水が豊かで冷涼な気候、急峻な山々が連なり平地が少ない、京都などの消費地に近い、といった立地特性を基本に、時代に対応した林業が展開されてきました。北山地域の森林、水系、集落空間などの特性を活かした固有の林業体系があり、持続的な森林資源の利用により、京都のみならず日本の伝統文化を支えてきました。

北山杉を生産する林業の歴史は室町時代にさかのぼり、大正期までは一つの株から数十本以上の幹を育てる「台杉仕立て」が主でした。「台杉仕立て」の森林は周辺のアカマツ林、薪炭用の広葉樹林など一体となり、特徴的な森林景観を形成してきました。大正期以降になると、磨丸太の流通範囲が周辺地域に広がり、生産量や売上高も昭和後期まで増加しました。北山杉の仕立ては、一斉林「一代限り丸太仕立て」が主となり、その景観は、小規模に分割された林齢の異なる林分のモザイクで構成され、枝打ちにより枝下高の揃ったスギが整然と立ち並ぶものになりました。

「二代限り丸太仕立て」では、通直で木肌の美しい柱などを生産するスギの



▲北山杉と杉丸太小屋の景観

◀北山杉の枝打ち



樹齢400年の台杉



北山杉の景観



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第13回 北山林業

一般社団法人 日本森林学会 林業遺産選定委員 深町加津枝



北山杉の運搬

品種を密植し、強度の枝打ちを行い、完満、真円となる長尺の細丸太を恒続的に生産することができず。作業に応じた鎌やナタなどが道具として使われてきました。そして、高品質の木材を生産するため、きめ細やかな伐倒・搬出・加工作業が行われ、集落内には加工場となる杉丸太小屋などの付属屋が建設されました。杉丸太小屋は、丸太生産の作業や丸太の保管を行う木造建造物で、北山林業の木材の加工の場として固有かつ不可欠な要素となっています。丸太の出し入れや通風を考慮された構造となり、内部は柱がなく丸太を立てかけられるよう添え木が取り付けられています。また、木肌の磨き作業では菩提の滝からの磨砂や清滝川の



北山杉の加工

水が利用されるなど、周辺の水系との関わりもありました。
 今日、北山丸太には磨丸太、天然(出)絞丸太、人造絞丸太等があり、数寄屋建築や一般建築等の床柱、飾り柱、タルキ材などとして利用されるほか、台杉は庭園樹としても用いられます。そして、北山林業の景観は、川端康成の小説「古都」や東山魁夷の絵画などでも高く評価され、「古都」では、「清滝川の岸に急な山が迫ってくる。やがて美しい杉林がながめられる。実に真直ぐに揃って、立つ杉で、人の心こめた手入れが一目でわかる。」と記述されています。
 2010年、北山杉・北山丸太の生産地である北山林業地域の振興を目的に「京都北山杉の里総合センター」が



京都北山杉の里総合センターの展示

設立されました。この施設には北山丸太や京都の木材が豊富に使われており、北山杉・北山丸太の育成・生産、北山地域の景観などに関わる様々な展示があります。また、「北山杉美林の見学」、「北山杉のお箸づくり体験」など北山杉と日本の文化について伝えるための体験・研修のメニューが充実しており、小学生から大人までが楽しく学ぶことができます。林業関係者、NPO、行政などが連携した「北山杉の里中川まちあるきツアー」、「北山杉・里山コンサート」や「Woodlyコンテスト」など、北山林業の景観や北山丸太を活かすための取組も広がっています。
 京都北山杉の里総合センターの代表理事であり、林業を営む吉田英治さん



北山杉のお箸づくり

は、「北山林業は、小面積の林分の皆伐を繰り返すことで成立してきた。林業という生業が支えてきた林業景観の多様な価値を共有していきたい。」と熱い思いを語ります。また、京都北山丸太生産協同組合の理事・事務局長の松本吉弥さんは、これから先を見据えながら「多くの人に北山杉の魅力を身近に感じて欲しい。そのためには店舗、マシオンなどでの北山杉を活かした新しい空間づくりを提案していきたい」と話します。北山杉の伝統を未来へ。優雅さと風趣をもちながら、自然のぬくもりを五感で伝える北山丸太は意匠材としての機能に優れ、現代建築や身近な木工品としても、多様で豊かな表情をみせてくれるでしょう。